

小川原湖民俗博物館の 軌跡と意義

渋沢敬三影響下の地方民間博物館

Activities to Preserve a Former Museum's Collection Materials :
On Local Private Museums under the Influence of Keizo Shibusawa

山田巖子

YAMADA Itsuko

- ① 研究の背景と問題の所在
- ② 博物館創設者と渋沢家の関わり
- ③ 十和田科学博物館と民俗展示
- ④ 小川原湖博物館から小川原湖民俗博物館へ
- ⑤ 民具研究の基盤を作る

おわりに

【論文要旨】

小川原湖民俗博物館は1961年に渋沢敬三の秘書であった杉本行雄が青森県三沢市に設立した民間博物館であった。2006年に経営が破綻し、建物の老朽化から2015年に廃館となった。筆者は2015年に当該博物館の旧蔵資料の移設に関わり、旧蔵資料の一部を勤務先の弘前大学人文社会科学部で預かり、整理と公開に努めてきた。その結果次のようなことが分かった。

渋沢にはこの博物館を「小川原湖を中心とした自然、人文を広く含むものとする構想」があり、杉本には「十和田湖と小川原湖を結ぶ大規模な観光計画」があった。当初総合博物館として構想された博物館が「小川原湖民俗博物館」と改称されたのは、中道等による精力的な民具蒐集の結果であった。中道には、上北地方をアイヌ民族をはじめとした少数民族と和人が交流した場であったことを生活文化から証明したいという意図があり、博物館の旧蔵資料の中には土器も含まれている。

旧蔵資料からはまた、小川原湖民俗博物館と宮本馨太郎の関わりを看取できる。旧蔵資料の中に「昭和35年 立教大学民俗資料室」と書かれた「民俗資料整理台帳」が残っている。当時立教大学教授であった馨太郎が小川原湖民俗博物館に送ったものであろう。馨太郎は、1962年に「日本在来民具の民族学的研究」で科学研究補助金を得て、その研究分担者の中に中道等の名前がある。また、岩手県在住であった森口多里もまた研究分担者になっているが、小川原湖民俗博物館には森口からの寄贈品があったことが「台帳」から読み取れる。

小川原湖民俗博物館は、宮本馨太郎には、「気心の知れた」相手のコレクションで、民具分類・整理のための試案を重ねる場として機能していたと考えることができる。

中央の研究者、郷土史家、実業家が、お互いの役割に深く立ち入らない形でそれぞれのなすべきことをするという協同のあり方が、地方民間博物館を可能にしたといえる。

【キーワード】 地方民間博物館, 民具, 宮本馨太郎, 文化財以前, 鉄道, 渋沢敬三